

ショートフィルム

「偽物に虫は止まらない」

(10分)

脚本 大岡俊彦

【登場人物】

笑子 (28) 薬剤師。普段は地味メガネ。

久保 (30) 薬を買いに来たイケメン。

ユミ (25) 笑子の後輩の新米薬剤師。

香 (27) 久保の彼女。

○薬局「薬師堂」、朝

大きな病院のそばの小さな薬局。
個人経営の古いたたずまい。

笑子（28）が小さな花を一輪、小さなコップにさしてカウンターに置く。
地味なメガネをかけている笑子。

ユミ（25）が慌てて走って入ってくる。

ユミ 「おはようございますっ！」

笑子 「遅刻」

ユミ 「すいませんっ。（外を見て）でも病院の診療時間まだじゃないですかー」

笑子 「私たちの相手する人は、病院から来るだけじゃないでしょ？」

ユミ 「そりゃそうですけど」

ばたばたとするユミを背に、花を整える笑子。

○同、昼間

久保（30）、入ってきて処方箋を渡す。

笑子 「いらっしやいませ。お預かりします。

お薬手帳はお持ちですか？」

久保 「……手帳って、つくった方がいいんですかね？」

笑子 「お薬同士がけんかすることがあるので、記録してもらえると発見しやすいですね」

久保 「あ、そんなこともあるのか」

笑子 「拝見しますね（処方箋を見る）」

久保 「（カウンターの花に気づいて）あれ？

これ造花じゃなくてホンモノの花なんだ」

笑子 「あ、その花屋さんの余りをいつもいただいているんです」

久保 「へえ。道理で」

笑子 「？」

久保 「偽物に、虫は止まらないでしょ」

笑子 「？」

花に虫（テントウムシ）が止まっている

る。

笑子 「ぎゃああああっ！ 虫！ 虫！」

パニックになり走り回る。

ユミ、奥から出てくる。

ユミ 「ごめんなさい！ 先輩、虫苦手なんです！」

久保 「……」

花を店の外へ持って行き、虫を逃がす。

久保 「はい（笑顔で花を渡す）」

笑子 「……（恋に落ちる）」

風が吹いて処方箋がはらりと落ちる。

ユミは慌ててそれを拾う。

○同、夜、調剤室

薬を調合しながら。

ユミ 「あのイケメンにガチ恋でしょ？」

笑子 「は？ 何言ってるの」

ユミ 「だってめっちゃ固まってましたよ。」

花受け取るとき

笑子 「薬剤師マジ出会えないから、今のうち見つけといたほうがいいよ」

ユミ 「だからあつたじゃないですか」

笑子 「……」

○次の日の朝、薬師堂

ユミ、げらげら笑う。

笑子 「（鏡を見て）……変かな」

笑子、眼鏡をやめてコンタクトにしている。

ユミ 「だいぶマジじゃないですか！ いや、コンタクト似合いますよ！ 次来て『メガ

ネやめたんですか？』とか話しかけられた

らどうします？」

笑子 「えっ、そんなの準備してない」

ユミ 「じゃイメトレしとかなきゃ！」

○別の日、薬師堂

久保がやってきて処方箋を出す。
掃除してたユミ、そわそわする。

笑子 「拝見します」

笑子、表情が曇る。

久保 「あ、今日はメガネじゃないんですね」

笑子 「……（処方箋を見たまま返事しない）」

○夜、同、調剤室

色んな医療書やネットを広げて、めちやくちや勉強している。

ユミ 「せっかくのチャンス、何してんですか勿体ない！」

笑子 「……それどころじゃないの」

ユミ 「？」

笑子 「……処方されてる薬が、どんどんき

つくなってる」

ユミ 「えっ」

笑子 「○○○と……○○○と……」

ユミ 「聞いたこともないです」

笑子 「でしょ？（医学書を探し続ける）」

○別の日、薬師堂

久保、来店。少しやつれた顔。

なるべく笑顔で迎える笑子。

処方箋を出す久保。

なるべく無表情でそれを読む笑子。

× × ×

薬を受け取る久保。

久保 「なんか、薬効いてないんですかね？

それとも医者変えたほうがいいのか。も

っといい薬ないんですか？」

笑子 「……私共は、処方箋通り薬を出すこ

とが仕事です。お医者様を信じて下さい。

セカンドオピニオンなら、別のお医者様に」

久保 「そうか。……そうですよね」

しよげて帰る。

笑子 「お大事に」

久保 「……（やつれた顔で）ありがとう」

○夜、同、調剤室

ひたすら調べものをしている笑子。
笑子 「なんで……なんで？ 処方はあるはず……」

○トレーニングジムの前

処方箋のコピーを読みながら、ぶつぶつ言っている笑子。

と、ジムから出てきた久保に出くわす。
笑子、慌てて処方箋をポケットに入れる。

久保 「あ。……えっと、誰でしたっけ、知ってる人だ」

笑子 「……（微笑んで）薬師堂の」

久保 「ああ。くすりやさん！」

笑子 「身体鍛えてらっしゃるんですか？」

久保 「ストレス解消にね。ダイエットしようと思っ、ずっとササミとブロッコリーとグレープフルーツで……」

笑子 「！」

久保 「？」

笑子 「今、グレープフルーツって言いました？」

久保 「（うなづく）」

くしゃくしゃになったポケットの処方箋を出す。

笑子 「これですよ！ 血圧降下剤がグレープフルーツのフラノクマリンと反応して、急激に血圧を下げすぎちゃうんです！ そのこと、お医者様に言いました？」

久保 「え、ダメだったんだ」

笑子 「お薬手帳じゃ分らないわけだ！ 今すぐ言ってください！ 助かるかも知れない！」

久保 「えっ。……はい」

笑子、スマホを出して電話するように言う。

○後日、昼下がりに、薬師堂

カウンターに座り、暇な笑子。
掃除しているユミ。

ユミ 「あのイケメン、全然来なくなっちゃ
いましたね」

笑子 「……」

店の外を、久保が通る。

ユミ 「あっ！ パイセン、早く追いかけて！」

笑子 「え、でも、なんて話せば」

ユミ 「治りました？ でも何でもいいじゃないですか！ もう来ないかもしれないし、連絡先聞かないと！」

笑子 「はい？」

ユミ 「ほら！ 今！」

ケツを叩く。

笑子 「……」

決意してダッシュ。

○前の通りの花屋

小さな花束を買っている久保。

おいついた笑子。

× × ×

笑子の妄想。

久保 「笑子のおかげで治ったよ。お札に花
をと思っってね」

花束を渡される笑子。うれしい。

× × ×

久保に話しかけようとする、香（2
7）が走ってくる。

久保、彼女に花束をあげ、二人は腕を
組んで去ってゆく。

笑子 「……そりゃ、彼女くらいいるよね……」

……

元気はつらつな久保。

笑子 「おだいじに（おじぎする）」

○夕方、薬師堂

久保の処方箋をシュレッダーしている
笑子。

ユミ 「なんで追いかけてなかったんですかあ」

笑子 「めでたしめでたしでいいじゃない」

ユミ 「勿体ないあんなイケメン」

笑子 「私たちの仕事はね」

ユミ 「？」

笑子 「……私たちの仕事は、二度とここに
来ないようにすること」

ユミ 「……」

シュレッダーを続ける笑子。

ユミ 「あ。虫」

笑子の肩に虫が止まっている。

× × ×

回想。

久保 「偽物には、虫は止まらないでしょ」

× × ×

笑子、虫を取って、店の外へ逃がして
あげる。

笑子 「……」

カメラ、引いていく。

笑子 NA 「ここは小さなおくすり屋さん。何
かあったらおたよりください。わたしたち
は、今日も扉をあけて待っています」